
落ちる切る沈む

早蕨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落ちる切る沈む

【Nコード】

N7521X

【作者名】

早蕨

【あらすじ】

.....
.....。沈め。
.....
.....。.....
.....。.....
.....

(前書き)

勢いで

ある夜、僕は自室のベッドでぼんやりと座っていた。少し肌寒い。いつの間にかあのまとわりつく暑さがなくなっている。秋になったようだ。夜の秋は寒い。僕は毎年そう思う。だんだんと涼しくなるのではなく、秋は突然訪れる。秋から冬へ、春から冬へ。季節の移り代わりを一番感じるのは秋だ。この寒さは、忘れない。ぼんやり僕は何気なくしまっているカーテンをそつと手での外を眺める。凜とした空気の中で佇む住宅がある。どこの家も電気がついていない。もちろん、僕の部屋も。

暗い。この世から光が消えてしまったのかと思えるほど暗かった。ふつと目を閉じ、すつと開けると、もうそこは別世界なのかもしれない。本当にそう思えてきて、僕はゆっくりと目を閉じる。カチカチと時計の針の音が僕の耳にはりつく。その音をかき消せないまま、目を開ける。世界は変わっているだろうか。変わっていればいいなと思う。、時を刻む冷たい音が先ほどと同じリズムでなっている中、小さな期待を持ちながら、僕は、死にたいと思った。

「私結婚するの」

居酒屋の席だった。淡々と、小学生が中学生になるかのように、ただ移り変わるだけかのように綾香はそう言った。笑ってさえないかった。嬉しいのかさえわからない。

「おめでとつ」

一度つばをのみこんでから、にこりと笑って僕は返す。「ありがとう」と返ってきた。いらいらした。僕にとって、それは重大な話だっただけに、あやかそのなんでもないかのような物言いに体がざわついていた。珍しいことだった。怒ることなんてほとんどない

僕の内面がざわつき、落ち着きを失っていた。僕は、自分から喋ることをやめた。いや、あやかからの言葉を待つしかなかった。

「一年以内には、だけどね。二年付き合ってるし、もう、いいのになって。浮気してるっばいけど、本気じゃないんだろっし」

意味がわからなかった。その抽象的な話の中で、僕は無数の想像を張り巡らせた。理解するのに、時間がかかる。噛み砕けない。

「うれしい？」

「わかんない。よく、わかんない」

あやかは言う。僕も、よくわからない。

そもそも、何故二人で呑んでいるのだろう。何故僕を誘ったのだろう。何故このタイミングで結婚報告なのだろう。想像は出来た。一瞬で二つ、予想がついた。口には出さない。僕は、いつだってそうだった。自己解決。自己満足。それが常。悪い癖だとはわかってる。でも、やめられなかった。

僕は綾香と付き合っていた。

中学三年生の時だった。席が隣で、なんとなく気があった。同じように部活で汗を流し、同じ教室で授業を受ける。ただ、それだけ。なんでもないこと。どこにでも、いつでも、誰にでもあること。それでも、僕は綾香のことが好きになった。初めて人を好きになって、自分に自分で驚いた。一人の人を目で追い、その人のことを気にする。奇妙な感覚で、僕の中はいつもざわついていた。綾香はどうか。僕はそれが気になった。自分の中のその疑問が、きっかけだった。

僕は誰にもそれを言わず誰に知られることもないまま、告白をした。

そろそろ秋になるころのことだった。

「ありがとう」

と、綾香の一声はそれだった。淡々としている。感情が読みとれない。誰もいない公園。夜の凜とした空気。僕は声を発さなかった。「わたしもすきだよ」

綾香は言う。

「付き合ってほしい」

「うん」

恥ずかしそうにしていた。僕も、恥ずかしかった。でも、嬉しかった。この嬉しさは、なんだろう。感じたことのない、底から溢れる喜びが、僕の中を駆け廻っていた。綾香の言葉をそのまま全て丸のみするくらいに、僕は綾香に参ってしまった。

初めて、彼女が出来た瞬間だった。

綾香は活発な女だった。学級委員をつとめ、みんなのまとめ役。部長もこなし、人前でも堂々と喋ることができる。でも何故か、友人が多いわけではなかった。お喋りはする。でも、深くは付き合いわない。そんな綾香を、僕は知っていた。付き合ってから、それが顕著に伝わってきた。

テキパキと事務的な仕事をこなし、部活で汗を流す。誰と帰るわけでもなく、おしゃべりをするでもなく、綾香は同じように部活を終えて待っていた僕のところへ真っ先に来る。気を使ってくれているのかと思っていたけど、少し違った。綾香は基本的に誰かと一緒に帰るような人じゃないらしい。普段から、そうらしい。

「おまたせ」

「お疲れ様」

「かえろ」

「うん」

僕は自転車を押し、綾香は歩いていった。

荷物をかごに入れてやり、何気ない会話をしながら歩く。

会話は短い。でも、伝わっていた。と僕は思う。隣を歩く綾香が、

僕には小さな明かりのようで、夜道がとても微笑ましい。秋の寒さが、僕にはとても心地よかった。

僕達はそれぞれ違う高校に入った。新しい環境、新しい人。いろいろなのが僕らを待っている。小学校から中学校のそれとは違う。何か一つ上の壁をぶちやぶったかのような感覚が僕にはあった。相変わらず綾香とは付き合っていて、週に何度かは会っている。遊びに行くこともあった。僕は変わらずに、綾香のことが好きだった。

綾香の口から、知らない人の名前が出る。少し嫌で、少し嬉しくて、不思議な感覚。綾香は一体どう感じているのだろう。気になっただけど、口に出せるわけがなかった。

「好きだよ」

僕はたまに、そう口にした。確認するかのような言葉。綾香はいつでも微笑んで

「ありがとう」

と口にした。続くと思っていた。僕はどこまで、馬鹿だったんだろう。

僕は怒ることが嫌いだった。親同士が喧嘩するのを見てきて、怒ることがどうしようもなく嫌になった。だから、僕はいつでも笑う。辛いときも悲しいときも、僕は笑う。泣いたことはほとんどない。泣くと、父が泣くなと怒鳴っていたからだ。泣いちゃいけない、泣くと怖い。僕の中に、それがしみついていたのかもしれない。

だから、僕が綾香に別れを告げられたとき、僕は笑うしかなかった。それしか、知らなかった。

「ごめん、私好きな人ができたの」

言っていることはわかった。それを認めることもできた。でも、口からは何もでない。夜の公園。いつもの場所。そろそろ秋になるころだ。僕らは高校三年生だった。

泣きたかった。でも、泣かなかった。何故だろう。僕は泣くまいと思った。だから、笑った。僕よりも好きな人ができたのなら、仕方のないことだ。嫌だ、と言う気は何故かおこらない。

「その人のこと、大事なんだね」

「大事な。とつても」

「そっか」

「でも、別れでも、あなたとは、友達でいたい」

言いたいことはあった。でも僕は、自分の中で一生懸命に整理をつけようとした。漏れ出てくるところにつきはぎをして、周りから圧力をかける。

僕は全てを飲み込んで、綾香に微笑みかけた。

「わかった。今まで、ありがとう」

僕はただ綾香を縛っていただけなのかもしれない。楔を打つように好きと囁き、縛るように言葉をかわす。そんなつもりはなかった。でも、そうだったのかもしれない。よくわからない。僕は相変わらず自己解決を試みる。綾香には何も言わない。彼女はもういない。どこかへ行ってしまった。僕はこれから、どうしよう。

別れてからしばらくして綾香から電話がかかってきた。驚いたことに会おうとさえ言う。友達に戻ったのだからそれくらい変ではないのかもしれない。それでも、僕は綾香を女として意識してしまう。間違いなく、僕は綾香のことが好きだった。自己解決が下手糞なくせに、全部を飲み込もうとしてしまう。誰にも何も相談しない。辛いことも、悲しいことも。

そんな僕でも、綾香に気持を伝えられないことだけは、辛くて仕方なかった。友達の間まで、と言った綾香の言葉が、僕の中でひっかかっていた。このままで、いいのかもしれない。いい友達でいたほうがいいのかもしれない。

そんなことはわかっていた。それでも僕は、辛かった。

いじめられたときも、親の仲がとてつもなく悪くひどい喧嘩を見たときも、部活で辛い目にあったときも、綾香を好きになったときも、綾香に別れを告げられたときも、僕はなにもいわなかった。

けど、僕は我慢ができなかった。

言わずにはいられなかった。

別れてからの二年間。僕はひたすら苦しんだから。

結婚を告げる綾香の顔は、もう大人だった。僕らは成人していた。大学生だけれど、綾香はあのころの綾香ではなかった。ただ、僕だけが止まっている。

綾香はもう、次のステップに進もうとしている。わかっているのだろうか。僕が綾香のことをまだ好きでいることを知っているのだろうか。別れてからの綾香の行動に、僕がどれだけごちゃまぜになっただけか、知っているだろうか。

はつきりと物を告げない僕が悪いのだから、綾香に非はない。友達になろうと言われて、了承したのも僕だ。綾香は悪くない。全ては僕の一人相撲。隣を照らしていた小さな明かりは、今、他の誰かを照らしている。そんなことはわかっている。でも、一つだけ、最初で最後のわがままを言わせてほしい。言いたい、どうしてもいい。我慢は、嫌だ。

「……お幸せに」

それでも僕は、あのときと同じように微笑んで、綾香にそう口にした。

全てを飲み込み、切ろうと思った。ここで切らなきゃ、彼女に迷惑かもしれない。綾香に迷惑をかけるくらいなら、僕は自分を捨て

よじと思つ。

「けいちゃんさ」

綾香は、久しぶりに僕のことをあだ名で呼んだ。

「……ううん、なんでもない」

結局、彼女はその先を口にしなかった。

暗い。いつの間にか、僕の周りは真つ暗。誰もいない。今まで飲み込んできたものが、出てきそう、出したら僕はどうなるだろう。おえ、と吐いて、全てが出てきて、僕は一体どうなる。どすぐろい怒り、涙、不安や苦しみ、全てが僕をとりまいて、下へ下へと沈んでいく。沈むのは意識。淀む視界。不快な体。沈め、切れ、死ね、落ちて行け。

消えゆく世界。意識が飛びそう。ぐしゃぐしゃと、どろどろしたものにまみれながら僕はそっとカーテンを再び手でのける。

月も出てない真つ暗な夜。寒さが体に染みる。気にせず、死んだように横になる。意識を沈める。僕はこれからも変わらない。消えたらいいなと、小さく呟く。

それでも明日は、やってくる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7521x/>

落ちる切る沈む

2011年10月20日02時12分発行